

Title	やおい/BL を研究する：方法論とディシプリン
Author	石川 優, 東 園子, 西原 麻里, 杉本=パウエンス ジェシカ, 木下 衆
Citation	都市文化研究. 16 卷, p.116-125.
Issue Date	2014-03
ISSN	1348-3293
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科：都市文化研究センター
Description	シンポジウム
DOI	10.24544/ocu.20171213-049

Placed on: Osaka City University

◇シンポジウム◇

やおい/BL を研究する

—— 方法論とディシプリン ——

石川 優, 東 園子, 西原 麻里,
杉本=パウエンス・ジェシカ, 木下 衆

◆要 旨

現在、男性間の恋愛を主題とした女性向けの作品群であるやおい/BL（ボーイズラブ）は、現代都市の文化的風景を特徴づける重要なポピュラー文化として、高い学術的関心を集めている。しかし、多様な分野で研究が盛んにおこなわれる一方で、それらの研究と既存の学問制度——調査・分析手法や理論、それが帰属するディシプリン（学問領域）——との結びつきを整理する作業は充分におこなわれていない。

そこで本シンポジウムはやおい/BLに対してどのような研究アプローチが可能であり、それがどのようなディシプリンに位置づけられるのかを解きほぐし、やおい/BLを研究していくための道筋を示すことを目的としている。やおい/BL研究の方法論とディシプリンの関係を整理する作業は、研究者だけでなく、やおい/BL研究を志す学部生や大学院生、その指導にあたる大学教員にとっても急務である。

シンポジウムは、2012年度都市文化研究センタードクター研究員プロジェクトの採択を受けて、2012年9月9日（日）に開催された。第一部では、「好きなもの」を研究するための方法論（東園子）、マンガ表現の「数量」的分析（西原麻里）、やおい/BLの「領域横断」的研究（石川優）、グローバルなやおい/BL研究（杉本=パウエンス・ジェシカ）について報告がなされた。第二部では、木下衆による司会のもと、全体討論をおこなった。

本シンポジウムの対象はやおい/BLであるが、「ポピュラー文化をどのような方法論とディシプリンから研究するのか」という問い自体は、さまざまな分野で進展が著しいポピュラー文化研究にとっても重要な論点である。このシンポジウムは、やおい/BL研究にとどまらない、ポピュラー文化研究全体に敷衍可能な「方法論とディシプリン」に関する問題提起と議論を展開しているといえる。

キーワード：やおい、ボーイズラブ、ポピュラー文化、方法論、ディシプリン

はじめに

石川 優

本シンポジウムの大きなテーマは、「やおい/BL（ボーイズラブ）をいかに研究することができるのか」というものである。男性間の恋愛を主題とした女性向けの作品群を意味するやおい/BLは、現代都市の文化的風景を特徴づける重要なポピュラー文化として、批評家、実作者、研究者などによってさまざまな立場や角度から論じられてきた。しかし、それらの多様な研究と既存の学問制度——調査・分析手法や理論、それが帰属するディシプリン（学問領域）——との結びつきを整理する作業

は、これまで充分におこなわれてこなかった。

研究としての枠組がそれぞれ異なるにもかかわらず、「やおい/BL研究」としてひとまとめにされることによって、既存の学問制度との関係は見えづらくなる。このことはやおい/BL研究者だけでなく、やおい/BLを研究テーマを選ぶ学部生や大学院生、そしてその指導にあたる大学教員にとっても重要な問題である。やおい/BLを研究するためにはどのような方法論があり、それは既存のディシプリンにどのように位置づけられるのかを整理することは、やおい/BL研究の発展に必要な基礎的作業である。

以上の問題意識に基づき、本シンポジウムはやおい/BLに対してどのような調査・分析が可能であり、それ

がどのようなディシプリンに位置づけられるのかを解きほぐし、やおい/BLを研究していくための「見通し」を得ることを目的としている。ここではやおい/BLという特定の対象を扱っているが、「ポピュラー文化をどのような方法論とディシプリンから研究するのか」という問い自体は、さまざまな分野で進展が著しいポピュラー文化研究全体にとって重要な論点である。このシンポジウムでは、やおい/BL研究にとどまらない、ポピュラー文化研究全体に敷衍可能な「方法論とディシプリン」に関する問題提起と議論を展開している。

シンポジウムは、2012年度都市文化研究センタードクター研究員プロジェクトの採択を受けて開催された。このプロジェクトは、「大阪腐女子研究会」のメンバーを中心とした共同研究である。やおい/BLを愛好する女性を意味する「腐女子」を名前に冠する同研究会は、若手研究者を中心に2009年に設立された。同研究会は2010年度より継続してシンポジウムを開催しており、本シンポジウムは第3回にあたる。やおい/BL文化そのものに着目してきた過去2回のシンポジウムをとおして、やおい/BL研究の方法論とディシプリンに注目する必要性が新たな課題として浮上したことが、今回のプロジェクトにつながっている。

シンポジウムの構成は、4名のやおい/BL研究者による報告（第一部）と全体討論（第二部）である。まず、第一部では、報告者がそれぞれの研究手法とディシプリンとの関係について報告をおこなった。第一に、東園子が「好きなもの」を学術的に研究するための方法論として、「比較分析」の可能性について報告した。第二に、西原麻里がマンガ表現をいかに「数量」化して分析するかという点を議論した。第三に、石川優が「領域横断」的研究をめぐる課題について報告をおこなった。第四に、杉本＝パウエンス・ジェシカが、言語圏を超えたやおい/BL/スラッシュ文化研究の可能性について報告した。次に、第二部の全体討論では、木下衆による司会のもと、報告者とフロアの聴衆との間で活発な議論をおこなった。第一部の各報告の要旨、および第二部の総括と今後の展望については、本文を参照されたい。

本シンポジウムは、2012年9月9日（日）に開催された（共催：大阪腐女子研究会、協力：大阪市立大学都市研究プラザ、京都社会調査研究会）。会場は、廃業した銭湯をリノベーションした「天神橋アートセンター」である。この会場を選択した理由は、大学の大使室やイベントホールにはない銭湯という開放的な空間の力を借りることで、登壇者と聴衆がよりフランクに議論できると考えたためである。企画者の期待どおり、会場を埋め尽くす聴衆からは率直な意見や質問が多数寄せられた。このように聴衆が発言しやすい環境を用意することは、学部生や大学院生などの若い研究者（の卵）が集うシン

ポジウムだからこそ、必要な作業であった。本シンポジウムの成果が、やおい/BLを研究しようとする人に有益な視点を提供することを願う。



全体討論の様子

（報告1）「好きなもの」研究の方法論

東 園子

やおい/BLなどポピュラーカルチャーの研究を志す人は自身はその対象の愛好者であることが多い。だが、自分の好きなものを研究対象に選ぶことに対しては「客観的に分析できないのではないか」といった懸念を持たれることがしばしばあり、揶揄的に“「好きなもの」研究”と呼ばれたりもする。また、実際にやおい/BLの愛好者がやおい/BLを研究する中で行き詰まりを感じたという話も聞く。本報告は、報告者が学部生のころから自身の趣味を対象にした研究を続け、博士論文としてまとめるところにまでこぎつけた過程の中から、「好きなもの」を研究する際の方法論を抽出することを試みたものである。

研究の方法を決める際の指針となるのは研究者の問題意識である。そこで、報告者がこれまでやおい/BL研究に取り組んできた過程を時系列に沿って紹介することを通して、報告者の問題意識と方法論の変遷を示した。

報告者は小学校高学年のときに友人を通してやおい/BLの存在を知り、特に嫌悪感などは抱かなかったものの、何が魅力なのか不思議に思っていた。そして、高校生のときに中島梓がやおい/BLについて考察した『コミュニケーション不全症候群』という評論を読み、やおい/BLがこのような論考の対象になりうることを知って、自分も女性たちがなぜやおいに惹かれるのか分析してみたいと思うようになった。

その後、大学に入学して卒業論文のテーマを考えなければならない時期になり、やおい/BLを対象にするか、

自分が以前から好きだった宝塚歌劇を対象にするかで非常に迷っていた。漠然とだが、恋愛は女性にとって恋愛以外の何物かでもあるのではないかと思っており、やおい/BL もしくは宝塚歌劇を通してそのことについて考えてみたかったのである。そんなある日、両者には“同性による異性愛”と言いうるような共通する特徴があることに気づく。やおい/BLではカップルとなる男性キャラクターにそれぞれ「攻(せめ)」・「受(うけ)」という役割を割り振る。他方、宝塚歌劇では女性の役者が男性を演じる「男役」と女性を演じる「娘役」に分かれて男女の恋愛物語を上演する。どちらも同性の間にジェンダー的な役割を設けて、その間で恋愛を表現するという共通性がある。それまでやおい/BLと宝塚歌劇のどちらも研究対象として捨てがたく卒業論文のテーマを決めることができなかつたが、両者を一緒に考察することができるのではないかと思いついた。そして、“同性による異性愛”という独特の形式で恋愛を表現する両者がなぜ多くの女性たちに愛好されるのかを比較分析することで、卒業論文で取り組みたかった、一般的に言われるステレオタイプな女性像とは異なる恋愛に対する女性の意識を明らかにできるのではないかと思ひ、卒業論文用の研究を始めた。

この時点では報告者にとって好きなものは宝塚歌劇だけで、やおい/BLは特別に好きというわけではなかつたが、自分の研究の方法論的な意義はそこにあると考えていた。よく知っている宝塚歌劇を通してよく知らないやおいの魅力を考える、あるいはよく知らないやおい/BLからよく知っている宝塚歌劇の特徴を浮き彫りにするといった作業を往還することで、両者に対する理解を深めることができるのではないかと思っていた。

その後も引き続き卒業論文と同じテーマで研究を続けたが、博士課程からは社会調査を行うようになった。その理由は、それまではやおい/BLや宝塚歌劇の特徴等を列挙してそれを分析していたが、修士論文の口頭試問で報告者の専門分野である社会学にとって重要な実証性の欠如を指摘されたために、何か調査をする必要があると思ったからである。これまで明らかになっていないような愛好者の意識が知りたかつたので、厳密な仮説の設定が必要なアンケート調査よりも大まかな質問に対して自由に考えを語ってもらえるインタビュー調査の方が向いていると考え、やおい/BLと宝塚歌劇の愛好者に話を聞かせてもらうことに取り組み始めた。

インタビュー調査は非常に有用で多くの新しい発見があったが、大学院生ということで謝礼も払わず長時間貴重な話を聞かせてもらっているのに、それに見合うだけのものを相手に返せないことが徐々に苦痛になった。それはインタビューの最中に自分が考えている通りのことを相手が口にするのを待っている自分に気づいたときに

ますます大きくなった。当時は社会調査とは自分の主張したいことの正しさを示す証拠を集めるためにあると思ひこんでいたので、論文に引用して自分の考えが確かにそうだと証明できるような言葉を求めていたのである。だが、自分が既に考えついていることを他の人に言ってもらうために相手の時間を割いてもらうことに疑問を感じた。そんな折、自分の論文に対してもらったコメントをきっかけに、社会調査は自分の考えが机上の空論ではないと示すアリバイ作りのためにあるのではなく、対象をよりよく理解するために行うものだと気づいた。また、それまでオリジナル作品を中心とした同人誌即売会で補助的に参与観察を行っていたが、そのころ自分自身も既存のアニメ等のキャラクターを用いた二次創作やおいが好きになってその分野の同人誌即売会で参与観察をするようになり、様々なことが見えてきた。そのため、参与観察を主体に研究を行うよう方針を切り換えた。

こうして二次創作やおいを主な対象として研究を行うようになったことで、問題意識を明確にすることができた。報告者の根本的な関心は、なぜ女性たちは宝塚歌劇ややおいに惹かれるのかということにある。そのため、かつては両者の愛好者はやおい/BLや宝塚歌劇のどこがどのように好きなのかという漠然とした問いでもって研究していた。だが、調査を進めるうちに両者の愛好者は物語をどのように見ているのかという形に問いを絞り込むことができ、それが功を奏して研究を博士論文としてまとめることができた。

報告者が曲がりなりにも自分の好きなものを研究し続けられた要因を考えると、その一つには様々な形で比較という方法を取っていたことにあるように思われる。中でもやおいと宝塚歌劇の比較は報告者の方法論の根幹にあるもので、一方だけを対象にした論文を執筆する際にも頭の中では常にもう一方のことを共に考えていた。先述した問題意識の絞り込みもやおいの分析だけではなく宝塚歌劇の分析も深まっていたからこそ可能になったことである。また、やおい/BLや宝塚歌劇という自分と同じ対象を扱った先行研究のみならず、社会学の理論的な研究から文学研究まで、様々な対象を分析した議論を無節操に自分の議論の中に取り込んでいったのもよかったように思う。異なる対象についての分析と自分の対象についての分析を比べるという点で、これも広い意味での比較という方法を取っていたと言えるだろう。

そのように比較分析を行うことで可能になったのは、例えば、一ファンとして宝塚歌劇を見るのと同じ観点からやおい/BLを眺める、非愛好者としてやおい/BLで気になる点を愛好する宝塚歌劇でも考える、別の対象に対する研究の視角に基づいてやおい/BLを分析するといったように、分析対象に対して様々な視点を持つことだと考えられる。自分の中に愛好者以外の視点を育むことが

「好きなもの」研究をする際には有効なのではないか。

先述したように報告者は研究をする途中でやおいを愛好するようになり、その後の方が分析はしやすくなったが、やおい/BLの愛好者でないとやおい/BL研究ができないわけではないだろう。報告者の場合、やおいに対する基本的な見方は好きになった前後で大きく変化はしていない。確かに自身もその対象を愛好しているとリアリティを感じながら論文を書くことができるが、そのようなリアリティは多くの調査を積み重ねることで獲得可能なものだと考える。

研究対象を好きだからこそ研究しにくい面もあれば、研究しやすい面もある。だがどんな研究であっても、研究を始める前から研究者と分析対象の間には既に何らかの関係が（無関係という関係も含めて）存在することには変わりがない。その関係から生じる利点を活用し欠点をカバーすることは、好きなものの研究であろうがなからうが研究を行う上で必要なことである。自分が好きなものを研究することで陥りがちな弊害は確かに存在するが、それは対象が好きなこと自体に本質的に根差しているのではなく、対象との間にある関係の負の影響を抑えられないことから生じるもので、研究一般が抱える困難に敷衍できる質のものだと考える。「好きなもの」研究に必要なのは、他のあらゆる研究と同様、自分と対象との関係から来る長所と短所を見据え、それを踏まえて研究の設計をすることではないだろうか。

（報告2）数字地獄～数えてわかる ウソ？ホント？

西原 麻里

報告者は現在にいたるまで、マンガ表現論などマンガ研究の知見の援用や、数量的分析によるデータを用いた考察をメインに、BLを中心とする商業出版された女性向け男性同性愛マンガを対象に研究を行っている。そこで本シンポジウムでは、報告者が研究を進めるにあたってとくに意識したことである、対象を分析するさいの「客観性」——いま言い換えるならば「検証可能性」——と実際の分析手法とについて焦点化し報告した。

報告者はメディア学を専攻し、学部ではまずメディア文化研究を、そして「客観報道」といったジャーナリズム研究を学んだ。研究者の道へと進むターニングポイントになったのは、3・4回生で在籍したジャーナリズム系のゼミである。このころ学んだのは、物事を分析するさいの検証可能性、つまり情報のソースにあたることや、結果について反証が可能か否かが重要だということだった。メディアでの報道はもちろん学術的研究においても、

主義主張を裏付けるだけの信頼に足るデータがあるかどうか、言説の質に大きく関わることを学んだ。また、卒業論文では「オタクへの報道の様相」をテーマに執筆したのだが、「オタク」についての報道や先行研究では女性の存在がほとんど不可視化されていることに気づいた。そこで、さらに研究を続けたいと考え、大学院へと進学することにした。

大学院では、女性の「オタク」文化の一つであるやおい/BLをテーマに設定し、マンガなどのサブカルチャーや児童文化を専門とする竹内長武に指導を受けた。竹内は一次資料への調査を重視し、そこから導き出したマンガ表現の数量的アプローチや「映画的手法・同一化技法」²⁾といわれるマンガ表現論を展開してきた研究者である。報告者は、いったんジャーナリズム研究を経由したのち、ふたたびメディア文化研究へと着手することにしたのだ。

大学院ではまず、やおい/BLに関する先行研究の検討から始めたのだが、学部生時代の問題意識、つまり客観性/検証可能性についての疑問がここで再び浮上した。たとえば、対象の選定基準や分析方法が不明瞭なまま論が展開するもの。あるいは、一部の作品や受容者への分析のみでやおい/BLジャンル全般を解釈するもの。〈やおい小説〉のテキストを数量的に分析した永久保陽子の言葉を借りれば、「読者・作者」が女性という性的偏りに対する偏見や差別的思いこみ、従来の少女小説や少女マンガとの混同、一部の作品の分析結果からの拡大解釈などに起因するとおもわれる根拠のないイメージや情報³⁾による言説に対して、強い違和感を抱いたのだ。

ストーリーやモチーフなどが特徴的で、よくメディアの話題にのぼる作品は、頻繁に考察の対象になる。しかし、決して大多数からよく知られたものではない、物語や表現に目立ったところのない作品も、やおい/BL、そして女性向け男性同性愛という巨大ジャンルを形成する要素である。むしろ、そのような作品が大部分を占めているといえるだろう。一部の作品だけでは、ジャンル全体の輪郭をつかむことはできない。

また、やおい/BLと呼ばれるジャンルそのものや、攻め/受け区分といった“お約束”の形成過程、つまり女性向け男性同性愛マンガの歴史の変遷についての研究もひじょうに少ない。「少年愛」と呼ばれていた1970年代から「ボーイズラブ」という呼び名が広まった現代にかけて、女性向け男性同性愛ジャンルは大きな変容を遂げた。少年愛は既存の少女マンガへの異議申し立てであるとされる一方、ボーイズラブはお決まりのパターンで展開するエンターテインメントである、といわれる。しかしそれらの言説は、同時代のどれほどの作品にあてはまるのだろうか。また、いったいつごろから・どのように変化していったのだろうか。

このような疑問を「検証」するため、報告者は、女性

読者を対象としたマンガ雑誌ではじめて男性同士の恋愛物語が描かれた1970年から2000年までに商業出版された作品を対象とし、マンガ表現をベースに、ジャンルの歴史の変遷を描きだすことをテーマに設定した。そして先行研究や発表される作品の傾向から、約30年間を四つの時代に区分し、時代ごとの特徴や変容を明らかにした。そのさい、作品を可能なかぎり網羅的に調査し分析することを主眼に、客観性/検証可能性を意識し——つまり、それまでに語られてきた女性向け男性同性愛ジャンルの歴史や物語への言説が“ウソ”なのか“ホント”なのかを把握するために——「マンガ表現を数値化すること」を試みた。しかし、マンガ研究全般を見渡しても、マンガというメディアの表現に対して数量的手法をとったものはあまりない（商業BLマンガでは、守如子『女はポルノを読む』青弓社、2010年がほぼ唯一の成果である）。そのため、女性向け男性同性愛マンガの物語世界を把握するために有効な分析項目の設定を、手探りの状態から始める必要があった。

そこで考えたのは、物語世界を構成する「ストーリー」・「キャラクター」・「カップル」・「セックスシーン」という四つの側面⁴⁾から、まったく同じ分析軸によって各作品を調査するというものである。たとえば「ストーリー」を分析するための軸は、「時代」・「国や地域」・「エンディング」など。「キャラクター」を分析するための軸は、「年齢」・「職業」・「セクシュアリティ」「容姿への言及」など。このように各分析軸によって数量化し、同時代的傾向や他の時代との比較を行うことで、女性向け男性同性愛マンガの表現史を描きだそうとした。

分析の結果、女性的な美しさによる（つまり、女性キャラクターのある種の代替物である）キャラクターから、とくに1990年代後半以降はごくふつうの男性らしさが強調されるキャラクターへと人物造形の特徴が変化していったことなど、女性向け男性同性愛マンガの変容、またボーイズラブというジャンルの成立過程を、マンガ表現の面から浮かびあがらせることができた。「セックスシーン」の分析では、指導教員のマンガ表現論や、〈神の視点〉と呼ばれる場面状況を俯瞰するやおい/BLジャンル独特の視点に関する先行研究⁵⁾などを参考に、図像的にいかに描かれているかを数値化した。

マンガという図像表現を分析するさいには、描かれたものをいかに読み解くかというところに、分析者独自の視座が関わる。報告者の場合、たとえば、コマの枠線が引かれておらず隣接するコマと重なっているように描かれていても、視点が異なればそれぞれ「1コマ」と数える。また、1コマのなかに二人のキャラクターが登場し、片方は顔のパーツが描かれているがもう片方には描かれていない場合は、前者は「カメラのピントが当たっている＝読者の視線を促すキャラクター」、後者は「ぼやけ

ている＝読者の視線を意識しないキャラクター」とみならず。同様に、1コマのなかに二人のキャラクターがおり、片方は身体に影がかかっているがもう片方にはかかっていない場合、後者を「読者の視線を促すキャラクター」とみならず、というやり方である⁶⁾。分析の結果、攻め/受けで表情や身体が詳細に描かれる割合に差があったことや、「同一化技法」によって場面へ読者を感情移入させる仕組みが1990年代以降に増加した（とりわけ、攻めの視線に同一化して受けを眺めるよう描かれていることが多い）こと、同時に性行為をメインテーマに据えた作品が増加したことなどを明らかにすることができた。

数値による分析は、膨大な分析結果をデータ化し処理が容易なこと、グラフによって可視化し提示しやすいこと、時代ごとに比較できることなどが利点として挙げられるだろう。とはいえ、報告者の数量的分析の手法には限界もある。たとえば、分析手法がさまざまなマンガというメディア、そして図像表現という曖昧な部分もあるものを数値に転換するためには、細かい部分を切り捨ててしまうことがある。また、いわゆる“名作”や“駄作”と呼ばれるものなどもすべてひとしく「1」として数えしまう。そのため、ある特定の作品がジャンル全体へ及ぼした影響などは明らかにできない。報告者の分析軸が有効であったかどうかは、今後、まさに「検証可能性」に基づいて判断されるだろう。

そのほか、限られた時間と資金とでできるだけ多くの作品にあたらうと試みたものの、報告者自身の力が及ばず、1500強の作品（最終的に博士論文に反映できたのは1462作品）しか分析できなかった。限定された状況のなかで、一人きりで数えるのはまさに「地獄」だった。この点は今後ぜひ克服したい問題である。複数人でマンガ作品の調査に着手することができれば、より多くの作品にあたるのが可能になるほか、数量的分析の方法もブラッシュアップできるだろう。

一部の作品のみに注視せず大衆的なものも視野に入れる、客観性/検証可能性を意識した試みは、ジャンルやマンガ文化全体を意識せず特徴的な作品ばかりを取りあげる既存のマンガ研究への、一種の異議申し立てでもある。本報告が、これからのやおい/BL研究、そしてマンガ研究に新たな知見をもたらすことを期待する。

（報告3）「異端」としての「やおい」研究

石川 優

特定の研究分野において支配的とされるディシプリンや方法論から自分の研究が逸脱していると思われるとき、

その研究をどのように拓いていけばよいのか。本報告では、このような逸脱を「異端」と表現している。一般に「異端」とは権威化された「正統」に対置される周縁領域を指す語だが⁷⁾、ここでは支配的な潮流から離れた「端」という意味で使用したい。その上で、報告者によるやおいの物語機構の分析を、やおい研究と物語研究の双方において「端」に位置するものとして規定している。以下では、報告者の研究を通して「異端」としてのやおい研究の課題と可能性について述べていく。

報告者の問題意識は、やおいを通じて物語を「つくること」と「読むこと」の関係を解きほぐすことにある。この問題意識は、文学研究におけるテキスト理論につながっている。ロラン・バルトによると、テキストとは「織み上げられたもの」である⁸⁾。ごく大雑把に言って、テキスト理論の基本的な立場は、あるテキストの意味は作者によって刻まれるのではなく、読者に読まれる過程でそのつど生成される、というものである。「創造主」としての作者によって作品は創作され、読者はそれを一方的に享受する、といった考え方は覆され、読者がテキストの意味生産の担い手となる。この地平において、一編のテキストの意味を「織み上げる行為」とそのテキストを解きほぐす「読む行為」の境界は曖昧になっていく。

この理論を踏まえると、報告者の研究はやおいの担い手が原作をどのように読み、その読みをどのようにテキストとして編み上げているのか、というテキストの「織り糸」の絡まり合いをつぶさに検証していく作業であるといえる。やおいは原作を下敷きとして、そこに描かれる男性キャラクター間の関係を主に恋愛関係として編み直したものである。女性たちはただ受動的に原作を読むだけでなく、そこから各自が思い描く番外編や後日談を実際につくり出している。ある物語を読み、そこから別の物語を派生させるやおいは「物語を読み一つつくること」の関係を検討する上できわめて興味深い対象である。

研究内容は、マンガ同人誌のテキスト分析を通じて、やおいにおける原作の物語要素の継承と変形を検証する、というものである。具体的な検証作業としては、(1) やおいにおいて原作のキャラクター（単体および複数間の関係）がどのように描かれ、(2) そのキャラクターがどこで何をしているのかを原作のプロットとの関係から分析する。方法論としては、(1) に関してはマンガ表現論におけるキャラクター論⁹⁾、(2) に関しては文学研究における物語理論を主に参照し¹⁰⁾、原作とやおいの物語がどのように結びつき、乖離しているかを調査する。やおいの物語を支える仕組みを解明しようとする試みは、やおいが無数の担い手によって無数に生み出されている現在の文化状況の一端を明らかにするだけでなく、ポピュラー文化をめぐる物語の消費と再生産の構造を考えてい

く上でも重要な視点であると考えられる。

こうした報告者の研究を「異端」として位置づける理由はふたつある。第一の理由は、やおい研究における「物語機構の分析」というアプローチによるものである。これまでのやおい研究では、主に社会学、心理学、精神分析学の見地から「なぜ」一部の女性たちがやおいに熱狂するのか」という問題がジェンダーまたはセクシュアリティと関連づけて活発に論じられてきた。一方、報告者の研究は、女性については多くを語らず「“どのように” やおいが描かれているのか」という問題を物語という視点から掘り下げていくものである。「なぜ」に対する明確な回答を用意しない研究は、やおい研究の分野においてしばしば「肩すかし」のような印象を与えるようである。

第二の理由は、「物語研究」という枠組の中でやおいを扱うことに関わっている。報告者の研究は、主に文学研究で発展してきた理論を用いてやおいのマンガテキストを論じる、いわば「応用研究」である。テキスト理論や物語理論が対象とするのは主に文学、あるいは美術や映画などであり、その理論がやおいなどのポピュラー文化に応用されることは多くない。このように、報告者の研究は、やおい研究にとっての「女性」、物語研究にとっての「文学」とは（完全に切り離されたものではないにせよ）密接には結びつかない。双方の研究分野の潮流から離れた問題および対象を設定していることが、自身の研究を「異端」として位置づける理由である。

それでは、「異端」でありつつ研究を拓いていく上での課題とは何か。第一に、方法論に関わる点としては、いかに適切な手続きを経て応用研究をおこなうか、という課題がある。文学を前提とした物語理論をマンガに応用するためには、文学とマンガの間に横たわるさまざまなレベルでの違いを汲みとる必要がある。報告者の場合、マンガ表現論を接続することでこの問題の解決を試みている。マンガ表現論を選択する理由は、やおいと原作の物語の関係を検証する中で、キャラクターの図像の描き方に注目する必要性が浮上したためである。マンガの表現機構に注目するマンガ表現論は、この問題について考えていく上で有効な分析枠組であると考えられる。表現の差異を無視した応用研究に陥らないためには、自身の研究課題と研究対象の特性を十分に考慮して、複数の方法論を合理的な形で採用することがときとして必要とされるだろう。

第二に、ディシプリンに関わる課題としては、やおい研究と物語研究の双方に精通した研究者が少ない中で、誰が研究を評価するのか、という点を挙げるができる。むしろそれぞれの研究分野で指導や意見を仰ぐことは重要だが、その一方で、やおい研究と物語研究にまたがる「領域横断」的な研究と既に確立された学問制度と

の「折り合い」をどのようにつけるのかという点は、若手研究者にとって深刻な問題となる。研究者を目指す上では、ディシプリンという学問制度に対する自らの距離を定めることが必要であるといえる。

第三に、社会的な制度をめぐる課題を挙げたい。物語研究の基本はテキストの精読である。しかし、やおいがもつ「趣味」的な性質がそれを困難にする場合がある。やおいをはじめとする「二次創作」は、著作権や肖像権などの法的制度としばしば衝突する。こうした理由から、やおいの担い手が作品の現物を分析されることに抵抗を示すケースは少なくない。報告者の研究においては、上述の方法論とディシプリンの課題にとりくむだけでなく、社会的な制度との衝突を避けながら、やおい愛好者のコミュニティに配慮してテキスト分析をすすめる必要がある。例えば、分析過程をある程度抽象化するなどの手続きが要請されるだろう。このように、「異端」でありつつ研究を拓く上では、クリアすべき課題が多数存在する。

しかし、個々の課題をクリアすることと並んで重要なのは、自らの研究を「異端」として「主流」に対置することにとどまらず、研究の視野を広げていくことである。報告者の場合、映画研究と英語圏のファン文化研究には多くの示唆を受けている。映画研究では物語理論を映画に応用した研究がおこなわれており、主に英語圏のファン文化研究では、文学理論から二次創作を読み解く試みがなされている。このように、報告者と共通点をもつ研究はさまざまな分野で見出すことができる。報告者の研究にとって重要なのは、文学的物語研究とやおい研究にとどまらない、広い研究視野をもち続けることである。

特定の研究分野において先行例が少なく「異端」であると思われる研究であっても、研究視野を広げることで決してそれが「異端」とは限らないことが見えてくる。いうまでもなく、物語は文学の特権ではない。マンガ、アニメ、ゲーム、映画、テレビドラマなど、さまざまな表現の中に物語は遍在し、それぞれに研究の蓄積がある。やおいを通じて物語という広大な想像・創造の世界を探求するためには、「異端」を超えていく意志をもつことこそが重要なのである。

(報告4) やおい/BL (とスラッシュ) —— 30歳をすぎた社会学者 が新世界の発見 ——

杉本=バウエンス・ジェシカ

本シンポジウムのほかの報告者と違って、報告者は20代まで日本のポップカルチャーとはほぼ縁がなく、

ちょうど30歳を超える頃まで、BLというジャンルについての知識が全くなかった。

当時、報告者は日本学、文化・社会人類学、そして社会学の学位を取得しており、一貫してジェンダーという視点を研究の中心に据えていた。そのため、女性が女性のために男性同士のロマンスを書く/描くというBL現象を知ったときは衝撃を受けた。そして、さらに衝撃だったのは、この現象が日本でのみ発生している訳ではなく、世界中にBLと同じようなジャンルが何らかの形で存在し、思いもよらないようなところでも（たとえば、法律により同性愛が厳しく罰せられる地域等）、ファンが力強くBLというものを支持しているということであった。そこで、BLという「新世界」を「発見」した後、直ちにBLの普遍的な魅力を研究対象にしようと考えようになった。

30代という「いい年」になるまでこのジャンルの存在すら知らなかった報告者には、10代の思春期からBLとともに育った多くのBL研究者とは違い、研究を進める上で不利に感じられる点もある。そのひとつが、ストーリーを読む視点という問題である。報告者にとって純粋なファンの視点からBLのストーリーを読むことは難しく、いわば「職業病」的に、数ページも読まないうちに様々な面から作品を分析してしまうことがある。一般の読者としてではなく研究者として作品を読んでもうため、一般の読者の経験が再現しにくいといえる。従って、一般の読者がなぜこのようなストーリーを好むのかということを追究するためには、当事者へのインタビュー調査を介さなければならない。

BL研究を始めた当初は、このジャンルは主に若者に人気がある若者文化であるため、30代である報告者が参与研究をおこなうことは困難なのではないか、という先入観があった。しかし、実際に調査を進めていくと、BLには11歳から81歳まで幅広い年齢層のファンがおり、2~3世代でBL作品を創作している家族も存在することを発見した。BL現象は国境を超えるだけでなく世代をも超えるという、もう一つの普遍的な側面を発見したのだ。

BLを「発見」した当時、報告者は大阪大学大学院人間科学研究科に在籍しており、「コミ論」(コミュニケーション論の略称)という研究室で研究を進めていた。指導教員は歴史社会学とジェンダー論を専門とする牟田和恵先生であり、博士前期課程では医療社会学の分野で修士論文を執筆した。博士後期課程でも同じ方向で研究を続け、当初は博士論文で「少子化」という問題を扱う予定であった。しかし、博士後期課程に在籍している途中で研究室の同期生によって文化社会学という路線に導かれ、結果として、博士論文のテーマを「グローバルBLファン研究」へと一変させた。博士後期課程に在籍して

いる途中で研究の方向性を転換することはとても珍しくはあるが、それだけBL研究が面白いものだということが象徴する出来事であるともいえる。研究テーマの変更後におこなった調査は、BLジャンルを好む国内外のファンにおけるジェンダー観の変容である。なお2013年現在は、当時の研究成果をまとめた博士論文を書籍化に向けて修正している最中であり、本年中に完成させたいと考えている。

研究を始めた2003年当時、BLというジャンルはまだ知名度がそれほど高くなく、特に報告者の周囲では、報告者の研究によってこの現象を初めて知ったという男性研究者も多かった。医療社会学を専門としていたころ、出産経験のある女性に対してインタビュー調査をおこないながら研究を進めていくうちに、報告者は「女性は女性同士でしか語れないことがある」ということを発見した。そして同様に、BLについて研究を始めたときも、BLは女性同士でしか語れないサブカルチャーであることに気が付いた。医療社会学とBL研究では研究分野は異なっているが、このような共通点があるという意味では、研究の方向性を転換したことにもそれほど苦労しなかった。

2003年から10年が経過した現在では、BL現象がポピュラー・メディアで頻繁に取り上げられるようになり（女性週刊誌などの女性向けメディアに限らない。文芸雑誌である月刊『ダ・ヴィンチ』2007年11月号では、腐女子とBLをテーマに特集が組まれた）、もはやBL現象を知らないという人に巡り会うことのほうが珍しくなってきた。

このようにBLをとりまく状況の変容を追いながら日本と海外で研究を進めていくなかで、世界中のBLファンとの出会いがあった。旧東ドイツで現地のファンが好むBL作品について学生と熱心に語り合ったり、インドネシアではバンドンの夜の町を車で走り回りながら、現地の腐女子3人と共にBLの好き嫌いを語り合ったりした。そしてもちろん、日本においてもたくさん情熱的なBL研究の仲間と巡り会った。

最後に、報告者のBL文化の捉え方について言及しておく必要がある。報告者は研究において、様々な媒体とメディアにおけるBL作品の人気を探ることで、世界中で多様に形成され、常に変容しているそれぞれの地域の腐女子文化を比較している。この比較を通して、それぞれの文化領域において女性が置かれている社会的な立場について識見を得ることができると考えている。さらに、これによって各文化領域に特徴的な面——特に、女性によって生産されるメディアの特徴や、女性向けの性表現がどの程度まで、どのような形で許容されるのか、そして女性の性表現が社会的にどのように可視的、または不可視的であるかという問題——に対する識見を得る

ことができるだろう。これらの識見は、フェミニスト・ポピュラー・カルチャー研究にとって重要である。それに加えて、BLというジャンルがいかに重要であるかという点についても主張していきたい。多くの読者にとって、BL作品はただのエンターテインメントであるかもしれない。しかし、たとえエンターテインメントであるとしても、BLは表現としての独自性が高く、ひとつのジャンルとして研究していく可能性が十分にある。ある意味では、BLジャンル全体が女性の置かれている社会的・文化的環境のパロディ的な様相を示しているともいえるだろう。腐女子文化には、男性中心の社会に対する女性によるカウンター・カルチュラルな祭典という要素を見出すことができる。

以上の視点をもちつつ、これからも引き続き、BL研究を追究していきたい。今後は、グローバル化する情報社会の中でBLというジャンルがいかに日本という国境および文化領域を越境するのか（あるいはしないのか）という問題、日本のBLが海外で受容された後に独自に発達していく過程、さまざまな国や文化領域におけるBLをめぐるハイブリッド・ジャンルの出現、ローカル化されたファン活動の特徴などについても調査していく予定である。

討論を受けて

木下 衆

討論は、フロアの聴衆からの質問を受けながら、聴衆と報告者間、報告者間、そしてときに聴衆間で、垣根を越えて議論を進めるスタイルで進められた。聴衆の関心と登壇者のバランスにより当日の討論が社会学寄りに偏っていたこと、また執筆者が社会学を専攻としていることから、以下の論考は基本的に社会学としてのBL研究に注目した立場から執筆されている。

この討論で一貫して論じられたテーマは、「データをどのように収集し、分析すべきなのか？」と要約できるだろう。当日の4報告の内、東報告、石川報告、杉本報告は、そうしたデータ収集・分析の前段階（テーマ設定など）に比較的注目した内容であった。そうした内容を受けて、「では、登壇者は具体的にどう分析を進めているのか」に議論が進んだと言えるだろう。

データ収集に注目した質問は、特に卒業論文執筆を控えた学部生、あるいは彼らを指導する立場にある大学教員から寄せられた。論文を書くために、できるだけ多くのデータを集めたいと思う。しかし、いくらでもデータを集められるわけではない。技術的にも時間的にも、必ず限界がある。例えばより「客観的」なデータとして、

BL マンガを購入した客の属性を調べたいと希望したとしても、出版社などにある購買層のデータにアクセスできるだろうか？あるいは、「BLについて調べたい」といったところで、ジャンルの広がりや前に途方にくれることもある。そこで、テーマを絞り込まねばならないことに気がつくのだが、では何に注目すれば良いのか？

そしてデータの分析に関する質問は主に、論文投稿を控えた大学院生から寄せられた。いったいどうやって分析の「客観性」を高めればよいのか？あるいは調査対象であるコミュニティ（ここでは同人誌サークルや即売会などが念頭に置かれる）の中で「暗黙知」のように扱われている知識、つまりメンバー間で「当たり前」とされているような知識を、どう言語化し分析すれば良いのか？

各質問への答えを詳述する紙幅はないので、ここでも各登壇者の回答に一貫したものを取り上げることにしよう。それは、「調査者が、調査対象についてよく知っている」という点を生かすことに他ならない。登壇者たちは、BL 作品を腐女子たちがどう読んでいるのか（例えば、「攻め/受け」の図式など）、あるいは即売会場の秩序がどう構成されているか（会場の壁際に人気サークルがあることなど）を、既に知っている¹¹⁾。分析は、そうした作品やファンコミュニティなどの調査対象に関する知識に則って進められることで、初めて妥当なものになるはずだ。すなわち、何か「客観性」の基準を研究者の側で設けて、それに応えようとするのは、適切ではない。

例として、西原とその他の登壇者の間での議論を紹介しよう。西原はより「客観的」なデータとして、BL マンガに登場する表現を数量的に分析している。しかしそのためには、各コマ（やそこに登場する表現）を数え上げる必要がある。そして作品から何かを数え上げるためには、攻め/受けといった関係性などを、作品から読みとれなければならない。では、その数え上げの妥当性は何に担保されるのか？それは、西原が（「世の腐女子たちが読んでいるのと同様に読める」という意味で）BL マンガを「適切に」読める能力に他ならない。そして西原は、報告の中で実際にマンガから表現を数え上げてみせることによって、自身の分析手続きの妥当性を示そうとした。もちろん西原の数え上げ方は絶対的なものではなく、反論されうるものである。しかしそれはあくまで、「BL マンガを読む」という実践に照らしてのことだ（つまり、「腐女子はこのシーンをそんな読み方はしない」など）¹²⁾。

ここで、東及び杉本が、報告だけでなく討論でも強調していた点、すなわち「私も腐女子になった」からこそすすめられた研究がある、ということの重要性を確認できるだろう。「腐女子になる」ということはすなわち、

BL 作品を他の腐女子同様に「読めるようになる」ということであり、即売会場などでの「振る舞い方」が分かるようになるということでもある。東が論じたように、そうしたコミュニティ内で「当たり前」とされている読み方や振る舞い方は、メンバー外からしたら極めて特徴的なものである（そしてそれを研究者はしばしば、「暗黙知」などと呼ぶ）。では、それは言語化できないものなのか？そうではない。「腐女子になった」研究者は、腐女子たちがどういう概念連関のもとで作品を理解し、コミュニティを形成しているかを理解している。さらにそれがいかなる点で特徴的かは、例えば腐女子になる以前の自身の経験（いかに作品のポイントが分からなかったか、いかに適切に振る舞えなかったか）に照らし合わせることで、うまく記述しうる。東の表現を借りれば、重要なのは何かの記述を「暗黙知」として諦めるのではなく、「具体例をあげて、それを細かく分析すること」に他ならない。

すこし踏み込むならば、こうした論理は「主観的—客観的」という軸で社会調査が評価されることを否定するものだ¹³⁾。研究者が「腐女子」として作品を読み、コミュニティ内で振る舞えることによって収集されたデータ、さらにその「腐女子」としての知識に則って展開された分析が「主観的か客観的か」というのは、問いの立て方が間違っている¹⁴⁾。もちろん、「それはあなたが調べたコミュニティ内だけの特殊な話なのではないか」といった反論もありうる。しかしだとすれば、再び東の言葉を借りれば、研究者がすべきなのは「特殊な状況がどう特殊であるかを細かく記述」すること以外にないのだ¹⁵⁾。

こうした議論は、文学理論に則った石川と、社会学に則ったその他の登壇者たちとの接点を見つける上でも、重要な論点だと考えられる。石川が対象とした二次創作作品は、元になった作品をファンたちが「変形」し、いわばキャラクター間の関係を恋愛に読み替えた作品群だと言える。既に作者があるキャラクター間に与えた意味を、読者コミュニティがどう読み替えているのか？そしてその「変形」を、研究者はどうデータとして収集し、また分析することができるのか？この「すでに人びとによって意味づけられているものをどう分析するのか」という問いは、社会学の社会調査にとって最も重要な問いだと言える¹⁶⁾。そしてこのシンポジウムは、BL 作品を対象にしながら、その問いを徹底的に論じたのだ。

このシンポジウム冒頭の石川の言葉を借りれば、このシンポジウムはやおい/BL 研究の「見通し」を得るために企画された。そして関係者として、私はこの試みは成功したと捉えている。「研究」は様々な段階からなる。そしてこのシンポジウムは、一日を通して、調査、分析、さらには研究者コミュニティのなかで自らの研究をどう

位置づけるかに関してまで、その諸段階を徹底的に論じた。重要なのは、各登壇者が自らの「方法論」(methodology)を、限られた時間の中で徹底的に記述し尽くそうとしたことだ。全ての登壇者が、自らの実践を聴衆と共有しようと努力した。だからこそ当日の討論は、卒業論文を控えた学部生からプロの研究者に至るまで、幅広い層を巻き込んで展開することができたと理解している。聴衆は様々な水準で、今後の「見通し」を得たことだろう。

注

1. 採択課題名は「ポピュラーカルチャー研究の領域横断的な方法論の検討——「やおい/ボイズラブ」を対象に」。指導教員は三上雅子（文学研究科）、研究代表者は石川優（同）、研究協力者は東園子（大阪大学）、木下衆（京都大学）、西原麻里（同志社大学）、秦美香子（花園大学）。研究協力者は五十音順。所属機関はすべて2012年度当時のものである。
2. 竹内オサム、2005、『マンガ表現学入門』、筑摩書房など。
3. 永久保陽子、2005、『やおい小説論』、専修大学出版局、140頁。
4. もちろん、セックスシーンが描かれない作品も多数存在する。そのため、「セックスシーンあり/なし」も調査している。
5. 溝口彰子、2000、「ホモフォビックなホモ、愛ゆえのレイプ、そしてクィアなレズビアン——最近のやおいテキストを分析する」、伏見憲明編『QUEER JAPAN』Vol. 2、勁草書房、193-211頁、堀あきこ、2009、『欲望のコード——マンガにみるセクシュアリティの男女差』、臨川書店など。
6. シンポジウムでは例として、山田ユギ『やらしい昼下がり』という作品の見開き2ページを使用した。
7. 日本国語大辞典第2版編集委員会他編、2000、『日本国語大辞典第2版』第1巻、小学館、1047頁。
8. Barthes, Roland, 1973, *Le Plaisir du texte*, Paris: Éditions du Seuil. (= 沢崎浩平訳、1977、『テキストの快楽』、みすず書房)
9. 主に、伊藤剛、2005、『テヅカ・イズ・デッド——ひらかれたマンガ表現論へ』、NTT出版、および、小田切博、2010、『キャラクターとは何か』、筑摩書房を参照した。
10. 主に、Genette, Gérard, 1982, *Palimpsestes: La Littérature au second degré*, Paris: Éditions du Seuil. (= 和泉涼一訳、1995、『パランプセスト——第二次の文学』、水声社)、および、Ryan, Marie-Laure, 1991, *Possible Worlds, Artificial Intelligence, and Narrative Theory*, Bloomington: Indiana University Press. (= 岩松正洋訳、2006、『可能世界・人工知能・物語理論』、水声社)を参照した。
11. こうした、あるコミュニティ内での概念連関や、空間の構造化のあり方を把握していること、すなわち調査対象の「常識的知識を適切に用いることにより、自然言語を使いこなして事態を記述できること」を、エスノメソドロジーならばそのコミュニティの「メンバー」であると表現するだろう。前田泰樹・水川喜文・岡田光弘編、2007、『ワードマップ エスノメソドロジー——人びとの実践から学ぶ』、新曜社の議論が参考になる。
12. 計量的に分析されるデータが、何らかの「数え上げる」実践によって支えられているということは、例えばキツセとシクレル、そしてサクスの問題提起以降、社会学にとって極めて重要な論点であったことは確認しておきたい。Kitsuse, John I. and Cicourel, Aaron V., 1963, "A Note on the Uses of Official Statistics" *Social Problems* 11(2): 131-139 及び、Sacks, Harvey, 1963, "Sociological Description" *Berkeley Journal of Sociology* (8): 1-16 (= 南保輔・海老田大五朗訳、2013, 「社会学的記述」『コミュニケーション紀要』24: 77-92)の議論は、現在でも示唆に富む。
13. シンポジウム当日の討論では穏やかに、「客観性の限界」と表現された。
14. 実証主義 (positivism) の論理が、(特にいわゆる質的な) 社会調査において不適切なことは、ヒューズとシャロックが集中的に論じている。彼らの共著、Hughes, John. A. and Sharrock, Wesley W., 1997, *The Philosophy of Social Research: Third Edition*, Essex: Pearson Education を参照せよ。
15. 加えて討論では、特に杉本及び東から、男性のオタク論はある種の基準として「一般化」されるのに対し、女性に関する研究は「特殊」なものとして扱われがちだという指摘があった。
16. 注14 であげたヒューズとシャロックの著作の、特に第5章を参照せよ。